

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.13 セメントの仏像

本稿は半分ウェブ版オリジナルであり、残る半分は紙面上で発表した記事である。以前に紙面で掲載した記事「神社仏閣」のうち、今回は仏教に関わる話題をテーマに書いてみたい。つまりは神仏分離というわけである。宗教とセメントがどのように結び付いたのだろうか。

セメント美術は仏像と相性がよい。そもそも日本近代のセメント美術は、仏像制作から始まった。読者諸氏は第1回の記事で紹介した仏像を覚えているだろうか。東京美術学校（東京芸術大学の前身）が制作した《楊柳観音》である。これは1903（明治36）年に開催された第5回内国勸業博覧会の会場（大阪市）に設置された彫刻作品である。明治政府が殖産興業政策の一環として、国内産業の発展と技術交流を目的に開催した内国勸業博覧会では、会場内に噴水が設置され、その装飾として彫刻作品が置かれた。噴水に置かれる作品として作られたため、耐水性のあるセメントが素材として選ばれたのだった。

前回の第4回内国勸業博覧会（1895年、京都市）の噴水に設置された作品は、耐水性の低い石膏を原材料としていたため、噴水から噴き出す水によって石膏がボロボロと剥がれ落ち、作品は見るも無残な姿となってしまった。この出来事を教訓として、今回はセメントが素材として選ばれたのであった。このようにしてセメントと仏像の組み合わせが生まれた。

ここで紙面に掲載した仏像に移ろう。記事では《大船観音》（神奈川県鎌倉市）を訪問した（図1）。本像はJR大船駅から徒歩数分の距離に所在、駅からも観音像の頭部が見えるので、その姿を見知っている読者諸氏もいるかもしれない。同じ鎌倉市であっても、全国的に有名な《鎌倉大仏》（金属）ではなく、鉄筋コンクリート製の観音像を見に行くのは、セメント美術研究者としての性であるとしかいいようがない。

小高い丘の上にある大船観音寺（曹洞宗）の境内に到着して目に入るのは、胸から上だけの特徴的な白亜の観音像だ。「下半身がない」というこの観音像を初めて見たときの衝撃は大きかった。人間を表現した彫刻作品、たとえば偉人の肖像彫刻では、胸から上（バストアップ）の作品は見慣れていたが、これが仏像となると違和感しかなかった。しかし全身像ではないというこの点こそ、この本像をユニークたらしめている重要な要素である。もともとは全身像を計画したが、建立予定地が東側斜面に崩れる地層だったことが原因で、全身像を断念したのだという。立像から坐像を検討したものの、地形との調和がとれないことからこの案も流れ、最終的には胸像に変更せざるをなかったという複雑な事情がそこにはあった。

《大船観音》の建立開始は1927年（昭和2）年。金子堅太郎・頭山満・清浦奎吾・浜地天松・花田半助らが、「観音思想の普及を図り、以て世間浄化の一助をなさん」とする建

立趣意書を作成し、工事費15万円と付属施設建設費5万円を目標に勧募が始められた。1929（昭和4）年に工事が着手されたものの、世界中を震撼させた経済恐慌が原因となり寄付金が思うように集まらず工事は中断。そして太平洋戦争中には、観音像の胎内を「日本の防空壕」に転用しようという案まで出された（図2）。

建設途中の状態のまま20年以上も放置された本像だが、1950（昭和25）年に勃発した朝鮮戦争による特需で再建に向けた動きが始動。1954（昭和29）年に財団法人「大船観音協会」が発足、和田三造（洋画家）や坂倉準三（建築家）に意見を求め、東京芸術大学の吉田五十八（建築家）を中心として、同大学の山本豊市（彫刻家）の設計と指導のもとに修仏工事が進められた。山本は小野田セメント協賛の野外彫刻展にセメント彫刻を出品した経験もあり、セメントの扱いにはある程度の経験があった。1957（昭和32）年5月に起工式が行われた。大仏完成の落慶式は1960（昭和35）年4月28日。ここによく《大船観音》が完成したのであった。総工事費は四千数百万円だったと伝わる。高さは約25m、幅は19m、重量は1,915tを誇り、屈強な鉄筋コンクリート造である。

本像の胎内では、鎌倉市内の戦没者の位牌が祀られ、本像の建築経緯がパネルと解説付きで展示されている。その展示からは、本像の完成に至るまでの並々ならぬ苦労が偲ばれる。仏像にもセメントは巧みに取り込まれている。人々の信仰の場に息づくセメント美術に触れた大船訪問だった。



図1 《大船観音》

観音の胎内へ 日本一の防空壕

有難や慈悲仁慈の
観音様の御胎内に日
本一の大防空壕が建
設され靈驗あらたか
な観音様の御手でス
ハ！空襲の砲には善
男善女の命を守らう
といふ 之は防空壕
構築時代に現はれた
異色篇である 観音
様は大船町大船無我
相山黙仙寺の山頂に
そびえる高さ30mコ
ンクリートの大観音
様で、先年頭山満翁
金子、清浦兩伯等名
士が發起人となつて
護國安泰を祈願 30
萬圓の豫算で起工し
たものが事變のため
工事中途にして中止
の已むなきに至り、
今日の如き状態とな



防空壕になるコンクリート
の護國観音と胎内入口

図2 観音像の胎内を防空壕へ転用する計画を報じた記事

(出典：『セメント界彙報』第398号、日本ポルトランドセメント同業会、1941年)